

国立大学法人10年の成果と課題

MEXT 磯谷桂介(博士・工学)

日本の産学連携と大学改革の進展

－1990年代以降の政策の変遷を中心に－

平成16年2月11日

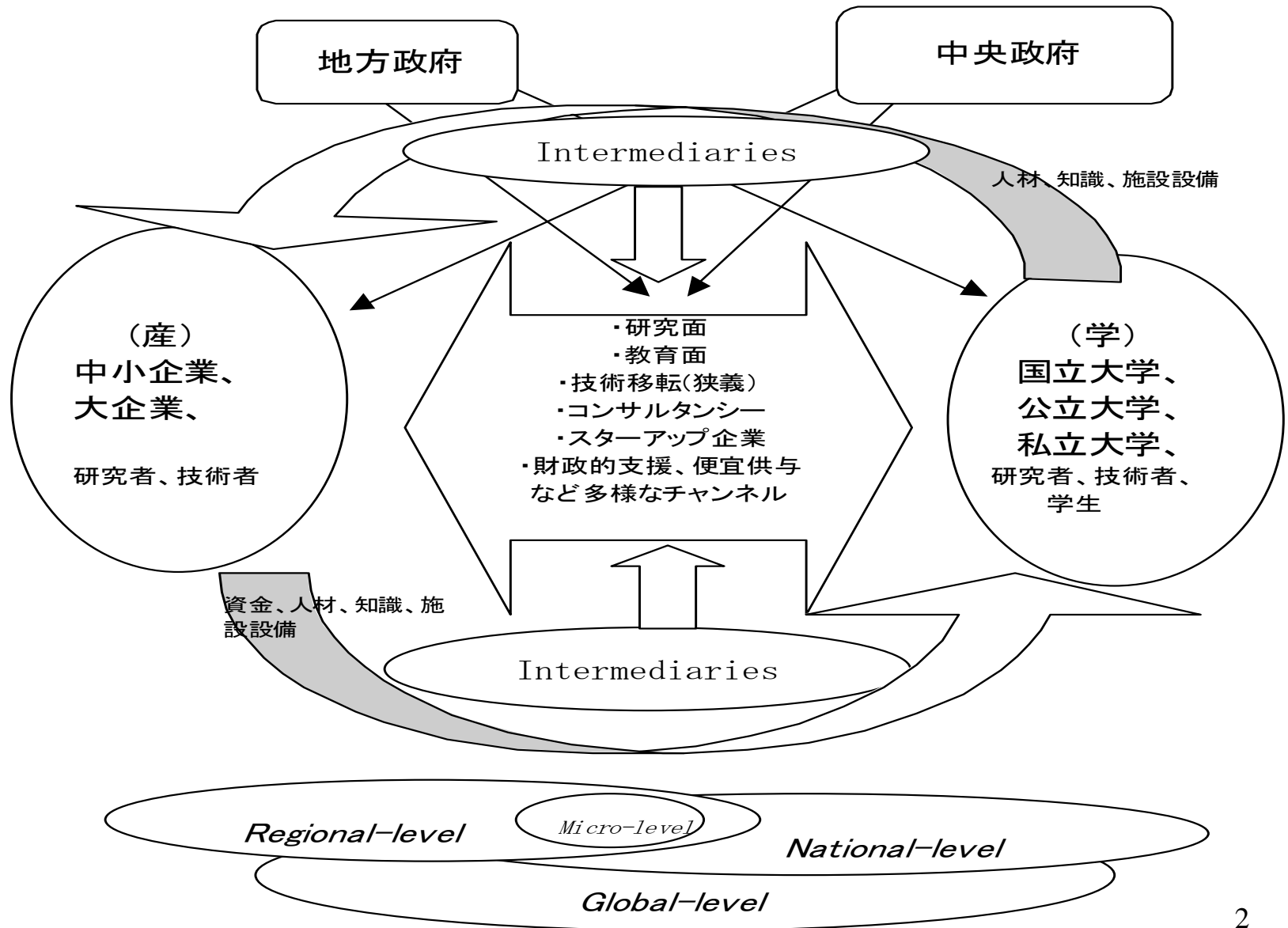
東北大学大学院工学研究科

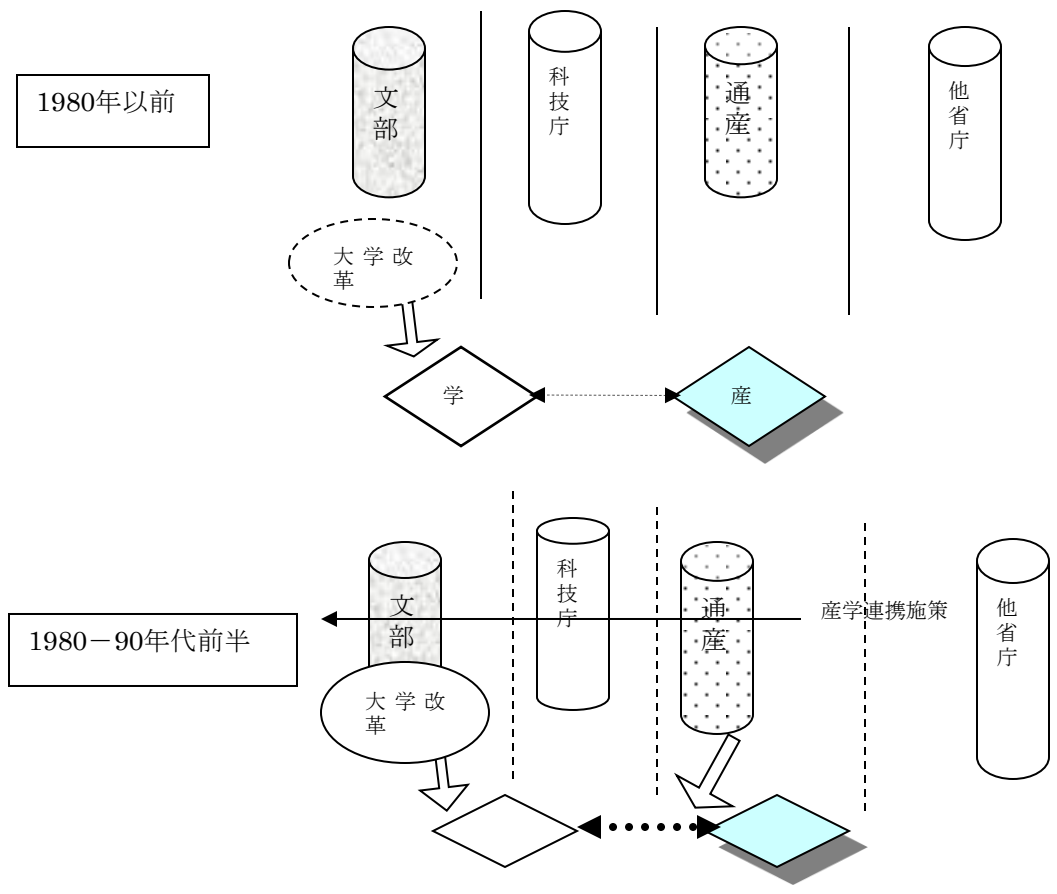
技術社会システム専攻博士課程後期

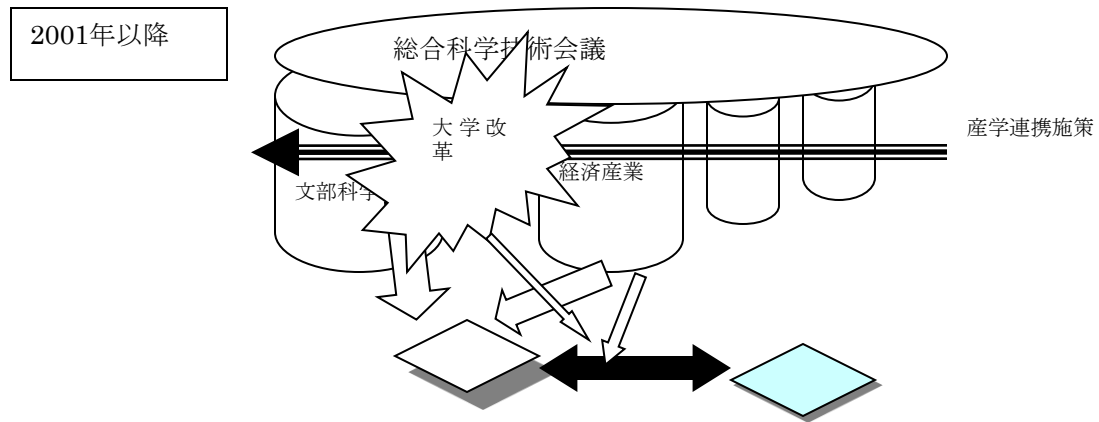
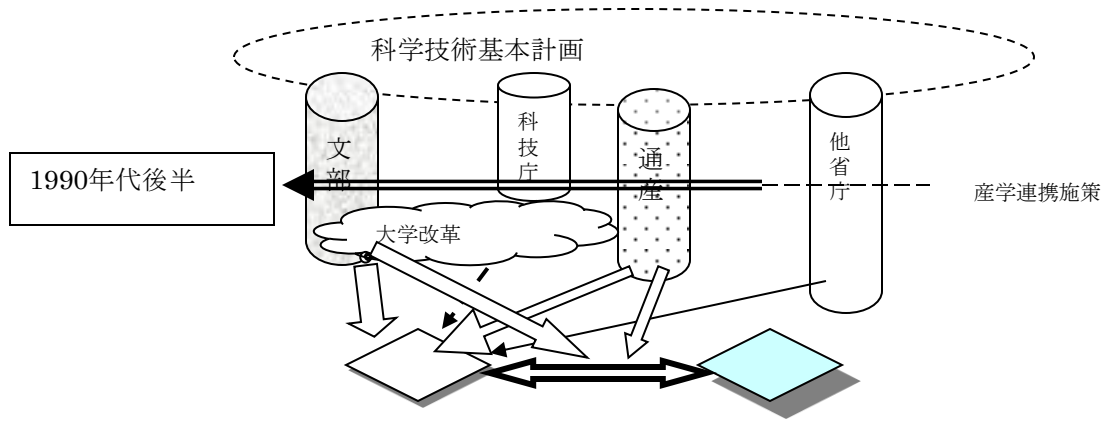
A3TD8004 磯谷 桂介

Isogai Keisuke

1. 3. 産学連携の多様・多層なダイナミクス







【まとめ】日本の産学連携と大学改革の進展 －1990年代以降の政策の変遷を中心に－

• 日本の産学連携・大学改革の新段階

「明治維新（黒船：国際化へ）」、「戦後（連合軍：民主主義と経済大国へ）」に続く「21世紀（IT革命：知識社会）」→日本の遅れを取り戻すチャンス。

上からの改革としての「大学法人化」。しかし、

→大学が自ら組織、方針をデザインでき、自己改革できる。

→日本の強みを活かした「産学連携多元モデル」の展開が可能。（日本の「セレンディピティ」を発揮）

「産学(官)連携論」: 4つの「わな」

1. **産学連携により、大学の研究開発を活用して、経済再生(特に、「即効型〇〇プロジェクト」の例)**
→研究面での連携はそもそもピンポイント、今の経済混迷を直接救えるか？
2. **一見、「産学連携」の議論がブーム。しかし、**
→一皮向けば、産業界・経済産業省からの「大学改革」への注文が圧倒的に多い(非公務員型法人の導入、大学設置の自由化等)。しかしこれだけで本当に産学連携が上手くいき、経済社会の活性化に繋がるのか？

「産学(官)連携論」: 4つの「わな」

3. アメリカをモデルとした一方的議論(「あるべき論」のみが先行)

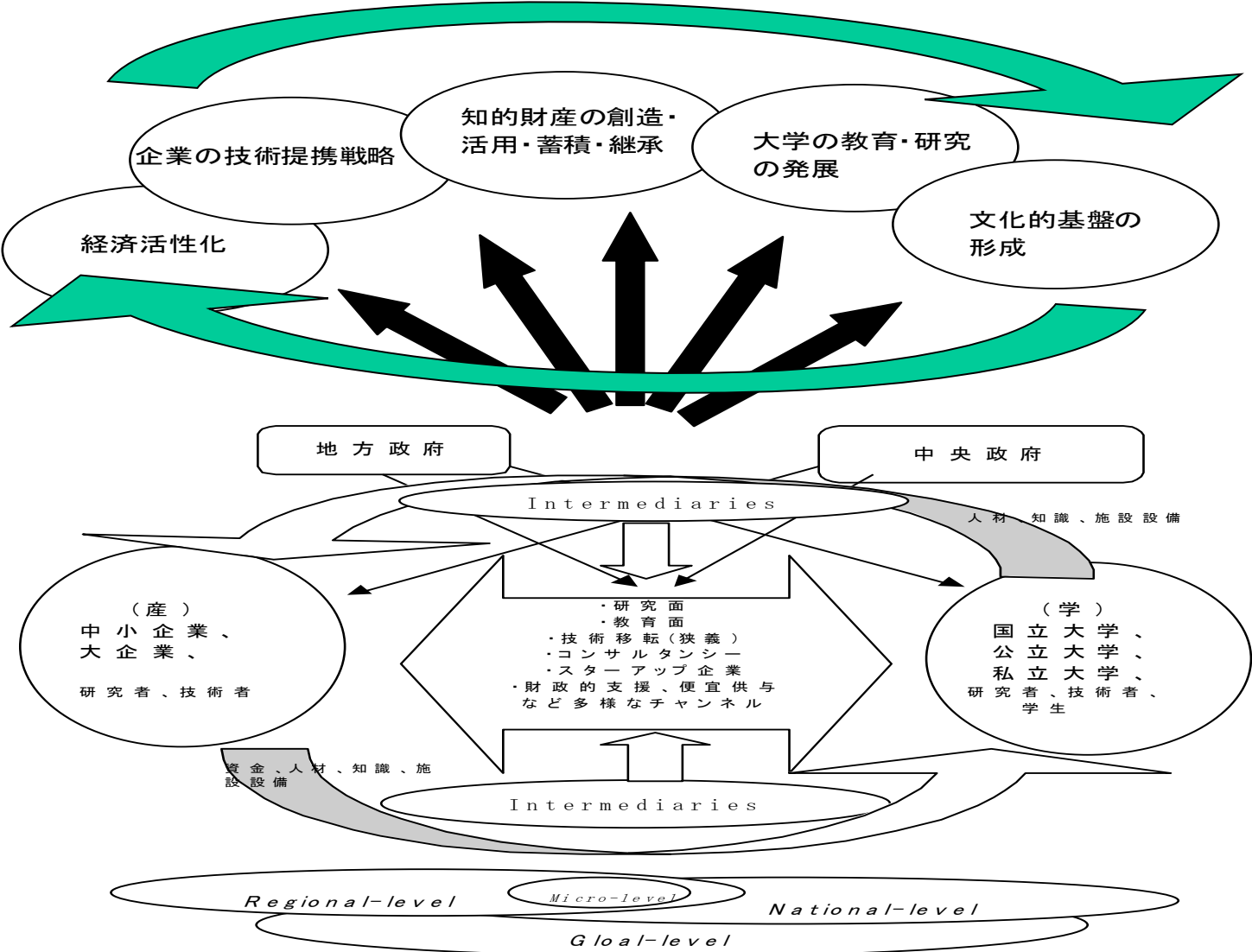
→現実のプレイヤー、当事者の自覚が重要。法制度の企画まではできても、改革に繋がるか？

4. 「産学連携」への過剰期待、時には悪乗り。

→過剰期待の反動は、「失望感」。地道な活動がつぶされる可能性も。また、「出る杭が打たれる」ことのないようにすべき。

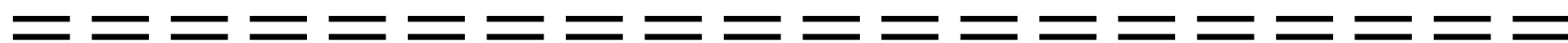
→**産学連携の本質は、異質・多様性、創発、「場」の創造 等。**

知識社会における産学連携多元モデル図



【まとめ】出来たこと、出来なかったと

- 法人格取得と産学官連携（大学自律性の自覚）
- 欧米の産学官連携システムに追いつけ？



- 運営費交付金↓科研費↑（→科研費悪者論へ）
- 省庁・独法縦割りの克服？
- CSTP役割迷走：STI政策マッピングすべき！
- 国際頭脳循環↓ガラパゴス化↑
- 人材育成・キャリアパス（流動性↓→）